

# 南海地震に備える

香川県防災局 乃田 俊信

<19>

## 歴史に学ぶ「稲むらの火」

【「稲むらの火」の原話】

「稲むらの火」というのは、1854(安

政元)年に発生した安政南海地震の際の実話です。紀州藩広村(今の和歌山県広川町)の豪商、浜口梧陵という人が、私財を犠牲にして、津波から村民を救ったという原話に基づき、道徳読本として戦前の尋常小学校の教科書(小学国語読本:5年生用)にも載っていた話です。

【「稲むらの火」のあらすじ】

沿岸の高台に住んでいた庄屋の五兵衛は、長い地震(安政南海地震)が収まった後に、海水が沖に引いて海岸に広い砂浜

や黒い岩底が現れたことから、津波の襲来を察知した。

村では、地震の後片付けや豊年を祝う宵祭りの準備に気をとられ、誰も津波の前兆に気付いていない。そこで五兵衛は、家の若者たちに命じて、収穫したばかりの自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまった。日はすでに没して、あたりは薄暗く、稲むらの火は天を焦がした。

庄屋さんの家の方角に上がった火の手を見た多くの村人が、火事を消そうと大声を出しながら高台に登ったその直後に、大津波が村を襲った。その時村人は、五兵

衛の稲むらの火に救われたことを知った。

【「稲むらの火」からの教訓】

この話から、

皆さんはどう感じられましたか?

「稲むらの火」から得た教訓を、

私なりにまとめてみました。

まず第1は、「地震や津波

に関する知識が身を守る」ということ。しかも、単なる知識だけでなく、洞察力、想像力も必要

であるということです。地震の後の津波

発生の予知、津波の前兆の看破、そしてこの直後どうなるかを見抜く能力が、多くの村人の命を救ったのです。

第2は、「災害時は、リーダーのとつさの

今後の防災につなぐ「稲むらの火祭り」  
でたいまつを手にする参加者たち  
和歌山県広川町で2006年10月



判断・決心と行動が生死を分ける」ということ。目前に迫った危機! これをみんなに伝える時間も手段もない。半鐘を鳴らせば、村人は混乱するだけ。こんなときのリーダーの判断というのは、難しいですね。

第3は、五兵衛の「人間愛、道徳観の高さ」。最も大切なものは「人の命」、「命を守るには、損失は覚悟」という崇高な精神です。

第4は、「日ごろからの人間関係の大切さ」「災害のときは助け合い(共助)の精神」。もし村人との関係が悪かったら、五兵衛はこんな犠牲を払わなかったでしょうし、五兵衛が悪徳庄屋であつたら、村人も庄屋の火事を消そうと高台には登らなかつたでしょう。

今日の防災にも、貴重な道しるべとなる話だと思えます。

【次号のテーマ】

次号では、「こんなこと、どこに存じますか?」と題して、地震大国・日本の常識についてお話しします。